

算数授業における問題提示場面の工夫

柴田学園大学 こども発達学科

齋藤 昭

TEL 0172-32-2289

FAX 0172-33-2486

e-mail a-saito@shibata.ac.jp

キーワード

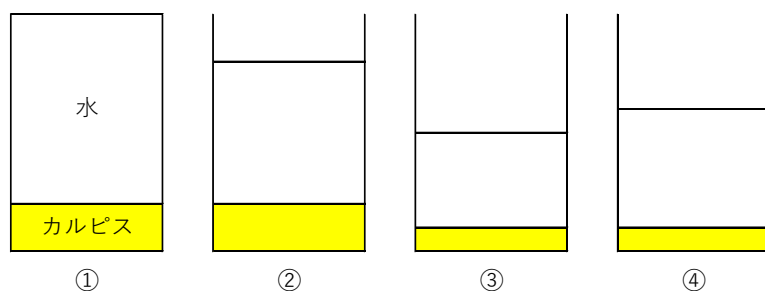
算数 問題解決型学習 問題提示場面 主体的・対話的で深い学び

子どもが意欲的に学習に取り組むためには、子どもに問いを持たせることが必要である。子どもが「あれ?」「どうしてかな?」という問いを持たずに、教師に指示された通りに動くようでは、覚えるだけの授業になってしまう。子どもが「なぜだろう?」と考え、課題に対して子どもたちが自ら働きかけた時に子どもたちの意欲的な活動が生まれる。

子どもに問いをもたせるためには、問いが生まれるような優れた教材が必要である。また、その教材をどのように提示していくのかということも重要である。優れた教材であってもその提示の仕方によっては、その教材の良さを生かせないこともある。教材と教材の生かし方の両面について考えていかななくてはならない。

教師が教材を提示し、子どもからの問いを引き出すには、子どもが動いたりつぶやく場面をつくり、そこから教師が問いを引き出してやる必要がある。

例えば、6年生算数の「比」の授業での実践であるが、導入場面で次のような図を提示する。



子どもたちは、「①より②のカルピスが濃い」「①と③のカルピスは同じ濃さじゃないか」など発言する。そして、濃さを決めるのは水とカルピスの量であることを

確認していく。

また、この場面ではあえて数値は示していない。数値を示すとすぐに計算しだす子がいる。感覚で自由に話し合う時間も大事にし、そこから課題を見つけていきたい。

学習指導要領で求められている授業改善の視点「主体的・対話的で深い学び」でも、課題の重要性は指摘されている。

授業のねらいを達成するためには、どんな教材を用いるのか、その教材をどうやって提示していくのか、これからも具体的な実践をもとにして考えていきたい。